

# 片目の道化師

オイラの眷属

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

私は道化師。素顔を隠し、物語のシナリオ通りに嗔い嗔われ、無様に踊り続ける。

▼事故によって片目を失ったダンスグループリーダー、ヒカリ。彼女は親友の勧めでライブハウスのスタッフになることになる。

▼アプリ版のメインストーリー終了後から物語がスタートします。拙い文章ですが楽しんで頂けたら幸いです。申し訳ないことにダンスの知識は皆無です。専門用語などは使えませんがご了承くださいませ。

▼ちよつと思いついたので試験的に実施。

「1」がついている回は基本コメディ。ついていない回は基本シリアスというシステム

にしようと思います。試験的にするものなのであまり気にしないでください。

# 目次

プロローグ	1
第1話 「就職初日！」	8
第2話 「レッスン！（前編）」	15
第3話 「レッスン！（後編）」	26
幕間 姉と妹、過去の罪	36

# プロローグ

夢を見る。

あの事故の時の光景だろうか。ぼやけて見える紅い視界。くぐもつただれかの悲鳴、叫び。

しばらくすると世界は暗転し、一筋の光が現れる。その中には過去の世界の自分がいた。その私は楽しそうな顔をしてダンスをしている。それはもう、殺したくなるほど笑顔で。

私はわかっている。夢の私は私の歪んだ願いの象徴であることを。きっと私はその歪んだ願いが叶うのを心の奥底では信じ続けていることを。それを肯定するようにその夢は毎日のように現れ、私を蝕んでいく。

—————

汗びっしょりで目が覚める。同居している姉はもう仕事に行ってしまったようだ。服を脱ぎ、クローゼットを開けた時にふと何日か前にいきなり家に押しかけてきた親友の言葉を思い出す。

「ヒカリ、退院してから外でてないんですよ。久しぶりに休み取れたからちよつと出かけない？ ガトーショコラが美味しいって有名なカフェに行きたいんだ〜！ 土曜日の朝の10時からね！」

それだけ言つてあつという間に去つていった親友の姿が目には浮かんだ私は壁に掛けてある時計を見る。

9時過ぎを指していた。

あつ。

「いやマジかマジかマジか！ ヤバイじゃん！」

眼帯をつけ、急いで服を選ぶ。あいつを待たせると後が面倒だし。

—————

朝食を代償になんとか待ち時間前に待ち合わせ場所に到着した私。お腹空いた、トホホ……。

「おまたせー！ごめんね！もうちよつと早く来る予定だったんだけど・・・」

「あ、いいよいいよ。私も今着いたとこだし」

私に手を合わせて謝っているのは月島まりな。私の昔からの親友だ。高校生からの付き合いだが本当に変わらないなあと思う。

「じゃあ行こうか。あんまり遅くなると列ができちゃうし」

「うん！楽しみだなあ！」

私とすれ違う人のほとんどは私の顔を横目で見てくる。多分、私に変なデザインの眼帯をつけているからだろう。こんな厨二臭いデザインの眼帯をつけているのには理由があるのだがすれ違う人にいちいち説明するわけにもいかない。だから外へ出ることを避けてたんだが、そろそろ慣れないといけないな。

店に到着し、まりなが注文をしている時も私を見て店員がちよつと驚いていたがすぐに気を取り直して注文を受けていた。コスプレとか思われていなければいいんだけど。

私達は指定された席に座り、しばらく雑談をしていたがしばらくするとまりなは真剣な顔をして私を見つめてくる。

「・・・ん？私の顔になんか付いてる？」

「ヒカリさ。これからどうするつもりなの？」

まりなが柄にもなく落ち着き払った声で私に問いかける。

これからというのは私の今の状況に関係してくる。

私は元々は、結構有名なダンスグループのリーダーだった。ジャズと同じぐらいの知名度はあったと自負できる。しかし、1ヶ月前にある事故に遭い片目を失った。後遺症が残る器官が片目だけで済んだのは不幸中の幸いだったが、しばらく音楽活動は出来なくなり、一応事務所には一時休業ということにしている。しかしそれは私が望んでいた対処ではなかった。

「……どういう意味よ？」

「そうだね……単刀直入に言えばもうダンスを辞めたいって思ってるのか」

「……いや、そんなこと思ってるじゃないよ」

「もう、ヒカリって昔から嘘つくのも下手だよ。それに責任感も強い……いや、強すぎて空回りしてるのかもね。ヒカリ、今チームの人にも迷惑かけてる。そして復帰しても目のせいで迷惑をかけるのが怖い……こんな風に思ってるんじゃない？」

「はあ……あーあ！バレちゃったか。敵わないなあ、まりなには」

「ふふつ、伊達に何年も親友やってないよ！」

本人は胸を張ってそう言ってるが私の心情を彼女が察したのは私が彼女の親友というからだけではないだろう。まりなは人の心の機微を読むのに長けている。その能力はライブハウスでの仕事でも役に立っているようだ。

「それでねっ！そんなヒカリに提案があるんだけど・・・私が働いてるC i R C L Eで働いてみない？」

「あのライブハウスで？なんでまた私が？」

「前に私がガールズバンドを対象にしたイベントがあるって言ってたの覚えてる？」

「うーん・・・？あつ、あの1つもバンドが応募してくれないって愚痴ってたアレ？」

「その覚え方はちよつとやめて欲しかったけど・・・そうだね。そのイベントなんだけど、新人スタッフの子が頑張ってくれたおかげで5つのガールズバンドが応募してくれてさー！イベントも大成功！すつごく良かったんだよ！本当に良かったの！」

「う、うん・・・凄いののはわかったから」

頬を紅潮させながらまくし立てるように喋るまりな。彼女がこんなに興奮して喋るのは珍しい。だがこのままでは話が脱線しそうなので本題に戻す。

「ところで私の将来とガールズバンド、なんの関係があるの？共通点が全く見えないんだけど」

「あつ、ごめんごめん。話がズレちゃったね。そのガールズバンドの子達なんだけどね。技術的にはまだちよつと荒削りだけど、皆音楽にかける情熱はアマチュアレベルじゃないんだ。そんな子達を見てればヒカリも自分がこれからダンスと向き合うか、わかるんじゃないかなーって思ったんだけど、どうかな？」

確かに音楽に真つ直ぐ向き合う子達の演奏を見れば、これから音楽とどう向き合うべきかわかるかもしれない。

しかしそんな簡単にスタッフになれるのだろうか？

「ちなみにオーナーからはOK貰ってるから、ヒカリがスタッフになりたい時になれるよ」

「まりなどという特権使ったの!？」

「え？元プロダンスグループのリーダーって説明しただけだよ？」

そういう風に説明しちゃったか……。まあライブハウスでしそうな仕事は大体出来るけどさ……。仕方がない。

「じゃあそこで働いてみようかな……。そろそろ働かないと姉さんに怒られるし」

「やったー!じゃあ明日にでもオーナーに挨拶に……。」

「ただし!私の前の仕事はバンドの子達にもスタッフさんにも言わないこと!私が働いてることバレるとライブハウスに迷惑かかっちゃうから」

「了解!私とオーナー、ヒカリだけの秘密だねっ!」

私は退院してから髪をバツサリ切り、染めて金髪にしていた髪も地毛に戻した。一度姉に誰?って言われたし多分外見でバレることはないだろう。

こうして私はC i R C L Eでスタッフとして働くことになったのだった……。

ちなみにガトーショコラはとても美味しかった。この時の私は知るよしもないが、二人は後にこのカフェの常連になる。

# 第1話 「就職初日！」

C i R C L Eのスタッフになった当日。私は早速ある女性と掃除をしていた。そこで私は思った。

ライブハウス広すぎない?????

ライブステージはもちろん、スタジオとかロビーとかもう部屋が多すぎる。カフェテリアとかもうダメ。暑い、炭になる。

正直に言うと、ライブハウス舐めてた。

掃除を終わらせた時に背伸びをすると、腰から変な音がした。入院していたとはいえさすがに運動しなさ過ぎたようだ。明日は筋肉痛を覚悟しないとイケない。

「はるさん……このライブハウス広いですね……掃除だけでも結構疲れる……」  
「お疲れ様です。今日はこれぐらいにしときましようか。それと、掃除は慣れればあんまり疲れなくなります。頑張りましょう！」

そう言いながら私に笑いかけてくる黒髪ショートトの女性。この人の名前は矢野はる。私の少し前に入ったいわゆる先輩だ……年下だけど。まりなが私の指導役として紹介してくれたんだけど、年上として接するべきなのか後輩として接するべきなのかイマイ

チわからぬ。

「こんにちはっ！」

「うわっ！いや誰君!？」

驚いた私が慌てて後ろを振り返ると、猫耳のような特徴的な髪をしている女の子がいた。さっきの元気な挨拶といい、この輝くような笑顔といい多分この子天真爛漫の権化なんじゃないかな？

ん？何か背負っているけど……これってギター……だよな？

ってことはまさかこの子って……。

「あ、香澄ちゃん。今日も練習？」

「はいっ！って皆まだ来てないんですか？」

「他のメンバーの子は……まだみたいだね。ちなみに集合時間って何時？」

「5時半です」

「え!?今4時半だよ!?まだ1時間あるじゃん!？」

「あ、あはは……早とちりしちゃいましたね……」

「えーと……はるさん?この子もしかしてガールズバンドをしてたりとかは……」

「そうですよ。ぽー」

「Poppin, Partyのリーダーをしている戸山香澄です!はじめまして!」

「・・・途中で遮らないで欲しかったなあ・・・」

え!?この子がリーダー!?大丈夫なのそのバンド!?

口に出しそうになったけどなんとか押し込む。

こちらも自己紹介をしておこうかな。ボロが出ないようになるべく要点だけ。

「私は野田光。ここで今日から働くスタッフよ。よろしくね香澄ちゃん」

「よろしくお願ひしますっ!とところでその眼帯は・・・」

「ちよつと事故があつてその時に・・・ね。多分外せる日は来ないと思う。変だと思つけど気にしないでくれればありがたいな」

「えっ・・・す、すみません変なこと聞いて」

「謝らなくていいよ。よく聞かれることだから」

口ではそう言つたが、内心は複雑だった。

眼帯のことを説明した時、謝られるのはあまり好きではない。だからといってその眼帯かっこいいよとか無責任なことを言われた時は相手を殴りとばしたくなる。本当に殴ることはないが。

多分、私は眼帯のことに関しては相手から何を言われても腹を立ててしまうのだろう。だが相手に怒りは決して見せない。私の弱い顔顔は二度と人には見せないと決めたから。

「……りさん？ヒカリさん？」

「あ……ご、ごめんごめん。ちよつと考え事しちゃつてた」

まずい、二人が心配そうな顔をしている。心配させちゃつたのはマズかつたかもな。どうしようか。そんなことを考えていると、まりなが書類を抱えながらこちらに向かつてくる。

「ヒカリ！掃除終わったー？」

「うん、今日のぶんはもう終わったよ。はるさんの説明もわかりやすかつたし、掃除はもう一人でやつても大丈夫だと思う。他に何かやることある？」

「うーん……初日だし、今日はもうこのぐらいにしとこうかな。じゃあまた明日からもよろしく！」

「ふふつ、わかつた。明日からも頑張る！」

まりなが親指を立てる。これが何を意味するのかわかつた私も渋々まりなに向かつて親指を立てる。これは私達が高校生の頃に流行っていたバンドのメンバーがよくやつていた仕草で、あの頃の私達は何かあるたびにこれをしていた。

今でも別れ際に冗談ですることがあるのだが……今しなくてもいいじゃん。ほら、はるさん苦笑してるし。ところが香澄ちゃんはそんな私達の様子を見て目をキラキラさせていた。嘘でしょ香澄ちゃん。

「ヒカリさんっ！まりなさんとは知り合いなんですかつ！？」

「え？ええ……まりなどは高校生からの付き合いだよ。今のも高校生の頃によくしてた  
仕草なんだけど……恥ずかしくないのかなあ……？」

「恥ずかしくないですっ！かつこいと思います！」

「そ、そうかな……？」

かつこいって言われたらそれはそれで恥ずかしい。なんと反応すればいいのかわ  
からなくなつてタジタジになつてしまった。でも香澄ちゃんがいい子なのはわかつた。

その時、私の携帯から着信音が鳴る。見てみると姉さんからだつた。最悪のタイミン  
グだけど出ないわけにもいかない。少し席を離れて出てみると、電話から聞こえてきた  
のは謝罪の言葉だつた。

『……ごめん』

「もう、今番組の収録中でしょ？どうしたのいきなり？何か変なことでもした？」

『……』

「……姉さん？」

私の姉さんは私がリーダーだつたダンスグループのメンバーだ。

グループには過激なファンも（ほんの一部だが）いたことは確か。姉さんがそういう  
輩によつて危険に晒されているのではないかと私が本気で心配していると



守とか言ってる姉さんが時間間違えてどうするの!？」

『じゃあヒカリ、頑張って』

「あつこら逃げるなー」

私が言い終わる前に携帯からはツイッターと機械音が聞こえてきた。ホントやつてくれたな。私は急いではるさんと香澄ちゃんのところへ行つた。色々な感情が混ざって身体が震えが止まらなかったけど。

「ごめん、急用が出来ちゃった。少し話とか聞きたかったんだけど、それはまた君のバンド・・・ぽっぴんばーてい・・・だったよね?そのメンバー全員が集まった時にでも聞こうかな。よかつたらその時に演奏も聞かせてね」

「はいっ!私もヒカリさんに聞いてもらうのを楽しみにしてます!」

「ふふっ、ありがとう。じゃあはるさん、私上がりませぬ。お疲れ様でした」

「えっ、あ、はい!お疲れ様です!」

私は二人に挨拶だけしてロッカールームに向かう。あそこまでの最短ルート、急いで調べないとなあ・・・。

## 第2話 「レッスン! (前編)」

メンバー達との食事が終わって倒れるように眠った次の日の朝。片目を擦りながら2階に降りると、姉さんは既に座って山盛りのご飯を黙々と食べていた。この人はよく食べる。食べるのに太らない。ちなみに私は太る。これが原因で姉さんとはよく全面戦争が勃発する・・・いや、「していた」が正しいのかな。

「おはよう姉さん」

「おはよう・・・ヒカリって何時から仕事？」

「8時半だけど。どうしたのいきなり」

「私、車で連れていこうか？」

「姉さん、車で私を連れてく時間なんてないでしょ？自転車で行くつもりだし大丈夫だよ」

「だけど」

「大丈夫だって。ほら、早く朝ご飯食べて行った行った」

姉さんは基本無口で何を考えてるのかわからないけど、事故から私を過保護にしている気がする。確かにあの事故は本当に酷いものだったから、心配する気持ちはわかるん

だけどそれが空回りしてるのかも．．．ん？このフレーズどこかで聞き覚えが．．．『責任感も強い．．．いや、強すぎて空回りしてるのかもね』

あ、まりなが私に言った言葉と似てる。

うーん．．．なんとというか．．．やっぱり姉さんと私って姉妹なんだね。

「むう．．．絶対に怪我とかしないでね？」

「わかってるって！行ってらっしゃい、気をつけてね」

「．．．ヒカリも気をつけてね」

そう言うのと姉さんは私を見つめながら家を出た。さて、私も朝ごはん食べよ  
バタアンツッ！ドオンツッ！（ドアノブが壁に当たる音）

「ピッ!？」

変な声出た。

「ね、姉さん！忘れ物でもしたの!?!そんな焦らなくてもいいじゃないの！ビビリなんだよ私!？」

「知ってる。わざとやった」

いつも無表情な姉が腰を抜かした私を見てニヤニヤしている。前言撤回、この人絶対私のこと心配してない。

「．．．．．」

「あ、違う違う。驚かせるためだけに戻って来たわけじゃない」

「じゃあ何? やっぱり忘れ物? 取ってくるから何忘れたのか言ってみて」

「ついてきて」

「ん?」

「ついてきて」

「え? いや私今から仕事なんだけど」

「まりなちゃんにはもう話してる、間に合わなくなるから急いで」

「うーん・・・私が行かなきゃいけない理由をちよつと姉さん掴まないで私まだ朝ごはんも食べてないー」

「現地調達する。ついてきて」

「00食堂じゃないんだから!? だから! 姉さん! 私を! 無理やり! 車に入れようと! し  
ない・・・・・・で」

姉さんは私が言葉を言い終わる前に私を車に押し込み、ドアを勢いよく閉めた。あの人は運動神経が形を成したものと云ってもいいぐらい運動が出来る。もうこうなつたら逃げることは無理だろう。とにかく、まりなに電話してどういふ事情があつたのか教えてもらおう・・・はあ、入って2日目で休む新人つてどうなのよ。

『ごめんねー！茜さんがどうしてもって言うから』

「そこは何とかして食い止めて欲しかったなあ・・・」

『茜さん、前からただけどすっごい押しが強いというか、電話越しからでも断れない雰囲気  
がじわじわしてたから・・・ね?』

「ね?じゃないでしょ!就職2日目で欠勤するスタッフとか聞いたことないんだけど  
!」

『大丈夫だって!スタッフの皆もヒカリが昨日頑張ってた様子は見てたから!』

「・・・私が迷惑かけてたりはしないよね?」

『あ!また悪い癖出てるよっ!うちのスタッフさんは1人休んだぐらいで気にしないよ  
!・・・それにイベントはまだまだ先だからお客さんあんまり来ないし』

「まりなもそういうこと言うのやめようね?」

『と、とにかくっ!ヒカリが責任感を感じる必要ないから!じゃ、私そろそろ仕事に戻るから  
!じゃあね』

「わかった。頑張つてね」

通話終了のボタンを押し、一息つくくと車のエンジンが止まる音がした。目的地に着い

たみたいだけど・・・もう外に出てもいいよね？

ドアを開けるとそこには私が何度か訪れていた建物があつた。中規模の芸能事務所だ。私達がまだ有名じゃなかつた時代にここでメンバーの1人とダンスのレッスンをコーチをしていた。そのよしみで、有名になつてからもたまたまに特別指導をボランティアのような形でやつていた。

私は最後に来てからもう半年は経っているが。

姉さんは私にバックを渡したあと、ぽつぽつと語り出す。

ん？今手渡されたバック私のじゃん！なんで姉さんが持つてんの!?

「あなたが大怪我をしてからはリュウがレッスンをコーチをしてるんだけど、今日はどうしても外せない仕事があるからって代わりに頼まれた。でも私教え方とかわからない。助けてヒカリ」

「・・・ここまで来たらやるしかないでしょ。それならそうと昨日の夜にでも言つて欲しかったけど」

「忘れてた」

「姉さん頭ハッピーセットなんじゃないの？」

姉さんには仕事に責任を持つてほしいものだ。

事務所の中に入ると、女性が私達を出迎えてくれた。高橋さん・・・だったかな？名

字しか知らないけどこの人がここのスタッフで一番前に話したところのある人だったはず。

「えーと・・・あかねさん？隣の女性は？マネージャーさんですか？」

「ヒカリ。ラプソディーのリーダーのヒカリです」

「・・・お久しぶりです」

「えっ!?!ヒカリさん・・・!?!その目は・・・」

高橋さんは途中ではつとしたように口を閉じ、頭を下げた。

「すみません！配慮が足りず傷つけるような言葉を・・・」

「あ、大丈夫ですよ。気にしてないですから」

もちろん嘘だ。この言葉は何度言われてもナイフのようにくさりと心に刺さる。だから弱い自分が出そうになる。だけど絶対に弱い自分は見せない。あんな思いは二度としたくないし、させたくないから。

何故だろうか。

姉さんが少し悲しそうな顔をしたのが見えた。

「で、ではレッスンスタジオに案内します！今回も研修生のレッスンをお願いします！」

「相変わらずあがり症ですね、高橋さん・・・」

レッスンスタジオに入ると女の子達がいた。15人ぐらいだろうか。私が以前コー

チを担当していたのも研修生だったがこの中に前に指導していた子は1人もいなかった。

私がスタジオに入るとザワザワしていた空気が少し引き締まるのを肌で感じた。

「今日限定でここのレッスンコーチをさせて頂くヒカリです。よろしく願います」

「え? ヒカリさんって今休業してるんじゃないの?」

「でもアカネさんがいるってことは本人なんじゃない? あの人達は姉妹関係だし」

「でもあの片目・・・」

私が名前を名乗った瞬間、張り詰めていた空気がまた元に戻ってしまった。

・・・予想はしてたけど、こういうヒソヒソ話とかされるの1番嫌いなんだよね。さつさと始めよう。

「はいはい私のことなんてどうでもいいから。大事なのはレッスンよ。歌って踊るのがアイドル。これは時代が変わってもあまり変わってないイメージね。だからアイドルを目指すんだったら、私の話は聞いて損はないと思うわ」

「ヒカリ・・・キャラが違う」

「・・・いや、これが私が持つてる『先生』のイメージだったからさ。レッスンのコーチを最初にした時にちよつとやってみたら、後戻り出来なくなっちゃって」

「へー、ヒカリらしい」

「えーつとなになに・・・？『細かい動きのダンス』ですって？いやリュウの計画表、抽象的過ぎ・・・え？振り付けの載ってる紙があるの？だからそういうことは先に言つてよ姉さん・・・ま、いいや。じゃあまずは一回踊つてみようか」

私はまずは全体で踊らせて一人一人の課題点を確認。全員が出来ていないポイントは私自身が踊りながら説明。何回もこれを繰り返すのをレッスン方法としている。この方法を使つて講師をしてきたからか、見えている人達は前と同じように指導が出来た。見えている人達は。

そう、ここでも片目が枷になつてしまつたのだ。

片目になつてから初めてコーチをするが、以前より圧倒的に視野が狭くなつてしまつた。そのため何人かの動きがよく見えず、結局そこは姉さんに見てもらふことにした。「あなたはもう少しテンポを遅くして。あとあなたはBパートのところ、もう少し手の動きを止めるタイミング早くして」

「ん、君は静止するのがちよつと音楽よりも遅れてるから気をつけて」

この研修生達は才能があるのか、はたまた努力の賜物か。私の知るよしはないが、基礎がしっかりしているし指摘された箇所は一回で修正出来ている。

そんな研修生を指導出来ること。そして久しぶりにレッスンが出来る嬉しさに、私も

少し熱が入ってしまったのだろう。あつという間に終わりの時間が来てしまった。

最終的には皆、紙に書いてあった振り付けを完璧に出来るようになっていた。

「いやー、皆凄いね。もつと頑張ればプロのダンサーとかとも互角に戦えそうだよ。私  
はもう来ないかもしれないから、今日のレッスンについての質問はリユウとかにお願い  
してね」

「ヒカリさんのアドバイス、すつごくわかりやすかったです! ありがとうございます  
!」

「どういたしまして。私も貴方たちのこと応援してるから、ダンスはもちろんだけど、他  
のことも頑張つてね!」

「[[[[[はい]]]]」

元気な返事をした後に次々にスタジオを後にする研修生。聞いてみればアルバイト  
に行ったり、歌のレッスンに行ったりするらしい。アイドルの道は厳しい。食事のまま  
ならないと聞いた事がある。

・・・あれ? そういえば私今日一回も食事してないような気がする。誰かさんのせい  
で。

コンビニで菓子パンでも買いに行こうかと考えていると、スタジオに高橋さんが入っ  
てきた。

「お疲れ様です！今日は本当にありがとうございます！」

「ふふん、いつでも頼ってください」

「ドヤ顔しないでよ姉さん。それに私の方が姉さんよりもずーっと働いてたと思うんだけど」

「あーあー何も聞こえない」

姉さんは無口なのに時々こういう意味のよくわからないボケをぶち込んでくる。姉さんの世間からのイメージは一言で表すならクールビューティーらしい。そんなクールなイメージのある人からいきなりよく分からないボケをかまされた大抵の人の反応はポカンとするか苦笑するかどうかだ。

高橋さんは後者だったようだ。「あはは・・・」となんとも言えない様子で笑っていた。3人の周りを微妙な空気が支配する。姉さんは自分のイメージとか一切気にしないタイプだから、こういう時の空気の切り替えをするのも私の仕事だ。

「ただどちらようど良かった。高橋さんには頼みたいことがあったから。」

「高橋さん、ちよつとだけお願いがあるんですけど」

「え？あ、はい！私達に出来ることなら」

「ああ、そんな気負わないでください。難しいことじゃないですよー」

「……彩のいるバンド……パステル  
パレットが今この事務所にいるようだったら、  
少し会わせて貰えませんか？」

### 第3話 「レッスン！（後編）」

「パステルパレットが今この事務所にいるようだったら、少し会わせて貰えませんか？」  
私の頼みを聞いた瞬間、満面の笑みを顔に浮かばせていた高橋さんの顔がみるみるうちに引きつっていく。

「えっ……ええええええーっ!? さ、流石に無理ですって! いくらヒカリさんだからってアポもなしに会わせたりしたら、上司から大目玉食らっちゃいますよ!」

「そうですか……やっぱり難しいですね。すみません無理言っちゃってありがとうございます!」

「……いえ、やっぱりせっかく来ていただいたのに何のお礼もせず帰らせるわけにはいきません。ちよつと待っててください。私、なんとかできないか上司に相談してみます!」

「え!? そんな大丈夫です高橋さん! 高橋さーん!!」

高橋さんはバツと後ろを振り返ると、私の話も聞かずにそのまま全速力で廊下を走っていった。

私のために動いてくれたのは嬉しいが、アイドルなどの芸能界の人間が、個人との面

会のためにスケジュールをズラすというのはまずありえない。私があの子に会うのは難しいだろう。

あの子がどんな風に成長したのか見たかったけど……事務所の事情に逆らってまで見に行くことは出来ない。

姉も私と同じ答えに行き着いたようで、私を励ますかのように私の肩に手をポンと置いた。

「残念だったねヒカリ。帰りにクリームパン買ってあげるから泣いたりしないでね」

「やめてよ姉さん。私だってもう子供じゃないんだから。絶対に泣いたりなんてしないよ」

「……そう」

さつきもそうだったけど、姉さんは時々こうやって私といる時にとても悲しそうに目を伏せる。何故かは全くわからないけど。

パスパレには会えないだろうけど一応高橋さんには帰りの挨拶ぐらいしなないとなどいう結論になり、廊下の椅子に2人で座っていると、高橋さんがドタドタと大きな足音を立てて戻ってくる。

私が高橋さんかと思いつながら椅子から立つなり、高橋さんは興奮したように私の手を握るとブンブンと振って、キラキラと目を輝かせながらとても嬉しそうに言った。

「話してみたら、ヒカリさんには色々とお世話になつてるからぜひ演奏も見て頂きたいと仰つてました！今からリハーサルらしいです！行きましようヒカリさんっ！」

マジですか。

—————

リハを行う予定だというスタジオに向かう途中、姉さんが訝しげにこちらを見て言った。

「ヒカリってアイドルのストーリーカー？」

「んなわけあるか！どうしたのいきなり!？」

「パスパレってどこかで聞いたことあると思つたら人気急上昇中のアイドルバンド。彩はそのボーカル。しかもヒカリ、前からそのバンドのライブの動画見たり、インタビュー雑誌買つてたりした。ついには事務所に押しかけて会わせてくれと言つてスタッフを困らせる。もうこれは誰がどう見てもストーリーカー」

「事務所のところから完全に話を捏造してるじゃん！彩は私の教え子よ！片目を失う前にダンスを教えた研修生の一人！」

「あ、そういうことね」

「ふふつ、ヒカリさんは彩さんを研修生の中で一番熱心にコーチしてたんですよ」

「・・・彩は本当は努力家だったから、私はそれに応えただけです。まああの子がバンド組んでから会うのはこれが始めてですけどね。バンド結成した直後にトラブったって聞いた時はなんとか助けてやりたいと思ってましたけど、その時の私は全身包帯ぐるぐる巻きで病院にいましたし」

「ヒカリそれ笑えないからほんとやめて」

姉さんの鋭い視線が私に突き刺さる。

事故で入院した時、見舞いに来た人の中で一番動揺していたのは姉さんだった。私の病室に来る時の姉さんの顔は死人のように青白く、怪我をしているこちらが心配するほどだった。まあ包帯で全身ぐるぐる巻きとまでは行かなくてもリハビリを含めて全治6ヶ月の大怪我だったし、姉さんがそのぐらいの大怪我をしたら私も動揺はするだろう。泣いたりほしえないと思うけど。

「着きました。すぐにリハ始まると思うので静かにお願いします」

「了解です」

スタジオに入ると軽快なリズムが聴こえてくると同時に、澄み切った歌声がスタジオ中に響き渡った。

(うわあ・・・ライブも見てたけど、歌も雰囲気も前とは比べものにならないわね・・・)

半年前とは明らかに纏う雰囲気が違う彩を見ながら、私はどう話しかけようかと困っていた。

「高橋さん……申し訳ないんですけどもう一つだけお願い、いいですか？」

—————

「彩さん、あとでレッスンスタジオに来てもらっていいですか？会わせたい人がいるので」

「会わせたい人……？はい、わかりました」

高橋さんに彩を呼び出してもらった。バンドメンバーの子達とはなんの面識もない（千聖ちゃんとは一回だけバラエティで共演したことがあったと後々思い出したので）上に、イヴちゃんと日菜ちゃんのインタビュを見た限り話のペースをあちらに持っていかれて彩とゆつくり話ができない気がする。あの二人はマジでキャラが濃すぎる。なんだよ「るんっ♪」って。なんだよ「ブシドー」って。ついていけないよ。いやこんなことパスペレファンの前で言ったら晒し首にされるけどさ。

スタジオでしばらく待っていると、ガチャリとドアの開く音がして、彩がスタジオに入ってくる。さつきは遠目に見ていたからわからなかったけど、近くで見たら前より

ずっと背が伸びててびっくりした。高校2年生だったかな? 成長期だね。

私はその頃から胸育たなくなってたけど。

「ヒカリさん、彩さん来ましたよ」

「どうしたんですか高橋さん・・・ってあれ?」

「久しぶりだね、彩。じゃあここで問題です。私は誰でしょうか?」

彩は、おどけて言う私の顔を見てしばらく考え込んだあととはっとしたかと思うと、大声を出しそうになった自分の口を抑えた。

「ヒ、ヒカリさんですか!? だいぶ感じ変わりましたね!」

「正解。よくわかったね。ちなみにこの片目はコスプレじゃないからね?」

「じゃあ休業の理由って・・・」

「うん。ちよつと事故があつてそれで休業せざるを得なくなつたって感じかな? まあ私の話はもういいよ。彩の話をしたいんだけどさ・・・」

「私の話・・・ですか?」

不思議そうにこちらを見る彩に、私は今まで彩に伝えられなかった気持ちを一気に解放する。

「すつつつごいよ彩! 私、入院してたから動画でしか歌聞いてなかったんだけどさ! あんな歌を歌えるようになってるなんてホントびっくりだったよ! 人気も急上昇中だし

私達なんてすぐに追い抜いちやぐえっ!」

「ヒカリ落ち着いて。彩さんびっくりしてる」

「あ、あはは・・・」

姉さんがテーブルから身を乗り出していた私の襟首を掴んだことで我に返った。

し、しまった。彩はポカンとしてるし高橋さんは苦笑してるし姉さんに限っては「うわ、引くわー」と言わんばかりの呆れ顔をしている。めっちゃイラツとくる。

「ご、ごめん彩。久々に話すからテンションすごい上がっちゃって・・・」

「ヒカリさん、変わってませんよね。いい意味で」

「うーん・・・性格は変わってなくてもダンスはだいたいぶ鈍っちゃったよ。彩もアイドル活動頑張ってるんだし、そろそろ練習しなきゃいけないなあ・・・あ、そういえば。彩はまだダンスの練習ってしたい? バンドアイドルだし踊ることはないと思うけど」

「したいです! パスパレが解散したあとは一人で芸能活動をしなきゃいけないですし、持てる技術は全て持っておきたいんです!」

「・・・君も変わってないね。いい意味で」

「へっ?」

彩が何を言ったか聞こえなかったというように気の抜けた声を出す。私はそれ以上詮索されないように話題を元に戻す。

「わかった!じゃあ私の仕事が休みの曜日・・・確か土曜日だった気がするんだけど・・・高橋さん、土曜ってレッスンスタジオは借りても大丈夫ですか?」

「え?は、はい!上に聞かないとわからないですけど土曜日はレッスンの予定はないですし、おそらく大丈夫かと」

「よし!じゃあ土曜日にスタジオ借りてやろうか!これから頑張ろうね。彩」

「はい!よろしくお願いします!」

私と彩が握手をしようとする、白い手が私の手を遮る。姉さんだった。

「ヒカリ、あなたさつき自分でも言ってたけどダンスの腕すごい鈍ってる。技術とかを口で教えることは出来ても実践は難しいと思う」

「ぐ・・・痛いところを・・・じゃあそこはリュウにでも頼むよ」

「リュウがやるなら私がやる」

「え?」

呆気にとられている私に対して、姉さんは胸を張りながらドヤ顔をする。

「私が手伝ってあげる。リュウが得意なのは本当はブレイクダンスだし、アイドルが踊るのには向いてない・・・それにヒカリと一緒にいる機会が少しでも欲しいし」

「え?なんで私と?」

「・・・いつか話す。とにかく私もそれに同行する。仕事がなかった時だけになるけど」

「姉さん。ダンスイベントは休日にあるのが普通なの。絶対休みなんてとれない」

「それを言ったら彩さんも同じだと思う。どうなの彩さん」

「あつえつはい！えーつと・・・」

いきなり話題を振られた彩はテンパったように手をジタバタさせるが、一度深呼吸をして落ち着きを取り戻す。

「休日は多分私達もイベントがあるとします。早朝とか夜じゃないと厳しいかもしれないですね」

「だってさヒカリ。ちなみに私は県外にでも行かない限りは早朝から仕事ってことはないよ」

「・・・わかった。じゃあ土曜日の早朝にレッスンスタジオでダンスの練習って感じにしよう。仕事と両立は難しいと思うけど頑張ってるね」

「はい！」「もちろん」

「ね え さん には 言 っ て な い ！」

高橋さんは終始私達の会話を聞いて苦笑していた。誰が見てもコントかよって言うたくなるような話の流れだったし。

これが私・・・そして姉さんのパスパレのダンスレッスンの始まりである。何故全員

のコーチをすることになったのかは、話せばとても長くなるのでまた今度にさせてもらおう。

## 幕間 姉と妹、過去の罪

「・・・・・・・・」

「すう・・・・・・・・すう・・・・・・・・」

彩と久しぶりに会った夜。私がお風呂から上がると、何故かリビングがフルーティな香りで充満していた。まさかと思ひ姉さんを探すと、ソファで穏やかな吐息を立てて寝ている。その近くのテーブルの上には氷の入ったコップと、栓が開き空になっているガラス瓶が。

「アレは私が飲むのを楽しみにしてたヘネシーなんかか・・・ッ！」

名前はまだ覚えていないけど、以前友達から勧められてハマった高級ブランドだ。甘みが強いフルーティなお酒で、これをロックで飲むのが私は好きなのだ。1本5万円ぐらいするから1年に1回しか買えない。なのにこの人半分以上も飲んでやがる。

この酒はアルコール度数が高く、酒に弱い人なら半分も飲めば間違いなく酔う。ちなみに姉さんは並の人よりずっとアルコールに弱い。多分べろべろに酔って寝てしまっただらう。

「・・・・・・・・姉さん、起きて。姉さん！」

「ん……ヒカリ……おはよう」

「おはようじゃないでしょ！これ高級ブランデーよ！私が奮発して買ったやつ！楽しみにしてたのに！」

「これ美味しくなかった。ヒカリの味覚を疑う」

「やかましいわ！もう……こんなところで寝て風邪ひきました。なんてことになっても困るし、さつきとベッドに行つてくれない？」

「……怒らないの？」

「……え？」

酔いが回ったのか、瞳を潤ませ頬を赤くした姉さんは私に顔を近づけてくる。

「ヒカリって私達が変なことした時に注意したり、冗談で怒ったりすることはある」

「まあ……ラプソディーは5人のうち2人しか常識人いないからね……」

「でもね」

姉さんは喉まで出かかった言葉を伝えるのを少し躊躇うように俯いてしまう。沈黙が部屋を支配し、今さつき降り出した雨がガラスに叩きつけられる音だけが響く。

グラスに入った氷がカランと音を立てると、姉さんは覚悟を決めたように顔を上げ、私の目を真っ直ぐと見た。

「……ヒカリは先生が亡くなってから、一度も自分の感情を人にぶつけたことないよ」

「————ツ」

「高校でいじめを受けた時も、先輩のダンサーから陰口を言われてた時も、番組のディレクターから理不尽なことを言われた時も、いつも1人で乗り越えてた。私は小さい頃の弱くて、卑屈で、泣き虫なヒカリを見てきたから、強くなってくれて嬉しい・・・ヒカリが目を失うまでそう思ってた」

「……………」

「でもなんで片目を失っても泣かないの・・・？ダンスができなくなるかもしれないのになんでそんなに笑っていられたの・・・？」

「……………」

いつも感情を表に出さない姉さんが体を、声を震わせていた。しかし、私がその問いに答えることはない。

「私って弱音をぶつけられないほど頼りないの・・・？だからヒカリはラプソディーに戻ってきてくれないの・・・？」

「・・・そんなことなー」「じゃあ頼ってよッ！」

私がかろうじて絞り出した言葉は姉の悲痛な叫びによって掻き消され、私はまた沈黙することしか出来なくなる。

「私を頼ってよッ！私のことそんなに信用出来ないの!?!1人で背負いこむのやめて、少

しでもいいから私にヒカリの弱さを見せてよッ！」

今まで奥にしまいこんでいた感情を溢れさせた姉さんを前に、私は心底今までの自分の行動を後悔した。

迷惑をかけないようにと、心配させないようにと嫌なことも笑って乗り越えてきた私は逆に姉さん達を不安にさせてきたのか。

そんな自己嫌悪に苛まれる私を姉さんの一言がさらに追い詰めていく。

「少しぐらい私にお姉ちゃん面させてよ……！」

私は先生が死んで、あいつに怒りをぶつけられてから、全てに耐え続けてきた。何があろうとも自分の弱さを決して見せないと決めたつもりだった。

だけどあの時……ライブのリハーサル中にワイヤーが切れて照明が私に落ちてきたあの時には、私は限界を迎えていたのかもしれない。

なぜ私こんな目にとという行き場のない怒り、ダンスが出来なくなるかもしれないという不安……そして二度と目は戻らないという絶望。

もう無理だった。

誰でもいいから寄り添える相手が欲しかった。

「……姉さん、ごめん、私もう無理だよ……」

不安を、恐怖を、怒りを、自分の全ての弱さを姉さんにぶつけようとした

その時だった。

どくりと、頭の奥で何かが胎動する。

「……………く……………あ……………」

「……………え？ヒカリ……………」

キーンと耳鳴りがし、私は頭を、体を、何かに内側から食い破られるかのような痛みに襲われる。嫌な汗が身体中から噴き出し、ついに私は片膝をついてしまう。

そんな地獄のような痛みを感じているはずなのに涙は全く出なかった。まるでその行為が禁じられているかのように

「いたイ……………いたい……………ア……………ア……………ツ!?!」

「ヒカリ……………!?!しっかりしてヒカリ!?!」

姉さんの言葉に応じることにも出来ない。意識が暗闇へと向かう。完全に私が闇に包まれる本当に少し前、私は瞼の裏に、怨嗟を宿した瞳を私に向ける銀髪の少女を見た。

どうやら私の中のあいつはまだ私を許してはくれないらしい。

—————

目を開けるとそこには無機質な白い天井があった。どうやらここは病院みたいだ。驚いて身を起こすと横から誰かが抱きついてくる。

「ヒカリ……！良かった……！」

「姉さん？私に一体何があったの……？」

「ヒカリ、家で突然頭を押さえて倒れちゃったの……！本当に心配した……！」

「……そう、だったんだ」

その時の事をよく思い出そうとしていると姉さんは私の顔をおもむろに両手で挟んで自分の方に向ける。

「どうしたの姉さん？私の顔に何か変なものでもー」

「ヒカリ」

有無を言わさぬ威圧感に満ちた姉さんの言葉に、冗談を言おうとした私は思わず竦んでしまう。

「今から言う内容を落ち着いて聞いてね」

「……保証はできないけど」

「お医者さんによるとね、ヒカリは心に深い傷を持っているんだって。傷は恐らく先生の事故死で出来たもの。ヒカリは自分の弱さが原因で先生は亡くなったと思ってる。だから自分の傷を開かないためにヒカリは無意識に自分の弱さを外に出さないようになっちゃって」

衝撃が走った。

私は決意などしていなかった。ただ過去のことを忘れるために、罪から逃げるために、つらつらと言いつつ諷を立てていただけだったのだ。

ますます自分が嫌になってくる。

「そんな生活を何年も続けていたってトラウマを克服出来るわけじゃない。むしろトラウマへの耐性はどんどん低くなっていく」

「……トラウマを思い出して気絶するほどに？」

「うん、あれは多分『自分の弱さを外に出そうとする』っていう行為によってトラウマが呼び起こされたんだと思う。トラウマの耐性が極限まで下がったヒカリはトラウマに

拒絶反応を起こした。これがヒカリが気絶した真相……ってお医者さんは言ってた」  
「……それってつまりさ。私これから一生人に弱さ見せないで生きていかなきゃいけないってこと？」

「……そう」

私と姉さんの間に嫌な空気が流れる。ここは普通の病室だから、この部屋には他にも何人か人はいるはずだ。だけど今の私にはこのベッドの周りの白いカーテンの向こう側には誰もいない……いや、何も存在していない。そんな気がした。

「あーそうなんだ。自分の弱さを人に見せられないし、外に発散することも出来ないんだ。これは生きづらくなっちゃったなあ」

「……」

「泣きたくないって言ったら嘘になるけど、泣いたら拒絶反応起こすし、そもそもさつき拒絶反応起きた時も涙出なかったから多分もう出ないんじゃないかな」

「……」

「あ、でも姉さん達には悪いけどさ。今まで通り、私は人に弱さを見せない。そんな生活でいいってことなら別にそんな気にする必要もないね」

「ヒカーー」

「姉さん、私いつ病院を退院できるの？」

「……今日1日はここにいなきやいけないと思う」

「うわあ……まりなにもまた迷惑かけちゃったな。あとで連絡しとかないと」

ペラペラとまくし立てるように喋る私の声は自分で聞いてもわかるぐらいに無機質なものであった。

そんな私の声を聞いていた姉さんは悲しげな顔をしていた。今までにないくらい、本当に悲しそうな顔だった。

私が話すのをやめると、辺りに沈黙が生まれる。カーテンの向こう側から誰かが話すような声が出た気がしたがそれはとても遠いものに聞こえた。

「ヒカリ」

姉さんが私の手を取り、その名を呼ぶ。私は戸惑ってしまい、さっきまで出ていたはずの声が出せないでいた。

「私は貴女の味方。絶対に貴女を守る」

「……」

「私はヒカリのお姉ちゃんだから、私ができることはなんでもする。トラウマもきつと克服できる」

「……うん、ありがとう。お姉ちゃん」

姉さんを『お姉ちゃん』と呼んだのは随分と久しぶりな気がする。姉さんも流石に驚

いたようで一瞬目を見開いたが、すぐにくすりと笑った。それにつられて私も笑ってしまっ

笑おうとなんてしていないのに

笑うことなんてできるような気持ちじゃなかったのに

—————

姉さんが病室を出ていくころにはもうテレビで昼のニュースが流れていた。今日は大雨が降るらしい。ちなみに姉さんは私が起きるのを不眠でずっと待っていたそうだし、そんな妹思いで無垢な姉さんにまた負担をかけてしまった。その事実が私の心をナイフのようにえぐる。

窓の外を見るとその空には蒼はなく、ただただ暗い灰色が街の上をすつぽりと覆っている。

『なんで！なんであなたが泣いてるんですか!?泣きたいのは兄さんですッ！貴女のせいで兄さんは死んだんですよ!?貴女さえー貴女さえいなければ兄さんは・・・ッ!』

なんでこの空を見て先生が亡くなった時のあいつの言葉を思い出したのかわからない。だがこの言葉を思い出したと同時に、私は片目を失った私を見舞いに来た時のあいつの言葉も思い出していた。

『・・・自分の感情を偽っていつでも笑って、まるで道化師<sup>ピエロ</sup>ですね。心底<sup>ピエロ</sup>気持ちが悪いです。まあそんな状態で毎日生活していたらいつか壊れてしまえそうですか』

(ピエロか・・・今の私にはちようどいい皮肉ね。あの子の言う通り、私は何年も周りに嘘を憑き続けてきたんだから)

空から打ち付けるように雨が降り出し、窓の外の景色は大粒の雨雫によつて塗りつぶされていった。